

---

# 奪取せよ！

一步

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奪取せよ！

### 【Nコード】

N9920X

### 【作者名】

一步

### 【あらすじ】

触れるな危険、仲が良くて羨ましいけれど関わりたくない。そんな評価を受ける一年五組。年相応にヤンチャな生徒達には、目前に控えた体育祭があった。そんな時、担任が言った言葉は……。

## 01・きつかけは正義の一言

大人が、あるいは大人になつた未来の自分が、青く固いままの実であつたと思う青春時代。目の前のことに必死で、単純で、大人ぶつていて、箸が転がることすら面白い。学校という狭い世界が全てで、まだそれにすら気付いていない頃。

些細なことに全力で、みんなバカみたいに真剣だつた。

市立南第一高等学校の一年五組は、ランダムに三十人を選んだにも関わらず、問題児が多かつた。四月の桜が咲き誇る入学式。髪を染め上げ生徒指導された十人のうち四人は五組の者で、ピアスをしてきて取り上げられた者が三人、登下校に自転車二人乗りをして嚴重注意が二人居た。入学式を終えたばかりで、これだけ問題が多いのも困つたものだ。そして担任が生徒指導を兼任している体育教諭というのだからやるせない。翌日のホームルームで、校舎に響いた怒声は他の新入生を怖気づかせるのに十分だつた。

その後も五月の親睦を深めるための自然学習三泊四日で、枕投げをしていた男子が絞られること数名、化粧道具を持ち込んだ女子生徒に嚴重注意が数名、障子や備品を破損したものが数名。その度に、担任の青葉の怒声が響いた。

六月、七月、と過ぎ行く中でも、一年五組に平穏な時などなかつ

た。クラス内で出来たグループは四つ。騒がしい男子、同じく女子、静かな男子、同じく女子、という具合に、分かりやすく綺麗に分かれた。授業中に教科書を立てて早弁する者もいれば、気に入らない先生に歯向かい泣かす事態まで起こり、青葉の怒声がやむことはない。

いつからか、五組は仲が良くて羨ましいけれど、関わりたくないと言われるまでになった。

ただ、五組の生徒のささやかな反抗は思春期特有のものなので、担任の青葉も生徒指導を担当する手前、特に驚いてもいない。そろいも揃って自分のクラスから、というのは学年主任や校長に申し訳が立たないが、彼等の根は真面目だと、青葉は確信している。

例えば色づく女子生徒。

化粧やピアスは校則で禁止されている。ただ、オシャレをしたい年頃なのは青葉も理解していた。女の子が女性になるまでの段階の途中である高校時代。規則は守れと声を荒げるものの、気持ちはわからなくはない。それに、叱られて反抗するものはいなかった。

「だって先生、私ずっと憧れてたんだもん。髪明るくしたり、ピアスしたり。かわいくない？」

いや、それ以前に規則守れよお前、と注意するものの、自分自身を楽しむためにしていることだ。誰かに抗うためではないという一点だけは、青葉は自分のクラスの生徒を信用している。

例えば迷走する男子生徒。

夏はポロシャツにズボン、春・秋は長袖カッター、冬はブレザーにネクタイという南第一高校の制服は一番近い中学校と制服が酷似

している。市内一ダサイ制服という称号を貰い受ける、ありふれた制服だ。洒落づくのは女子だけではなく、指定外のカッターを着用し、カジュアルブランドのベストを着て、お前の股はどこにある、と尋ねたくなる程ズボンを下げて履いている男子生徒もここ数年で増えた。

「え？ かつこよくね？」

「どこが」

「俺、いけてね？」

「だから、どこが」

「全体的に」

「よしわかった。明日までに直して来い」

「わかってねーじゃん！ セーギの立ててる襟と俺の腰パンは一緒だろ？」

青葉正義という名前は高確率で生徒に誤読みされる。マサヨシと読むより先に脳がセイギと認識するらしい。歴代の生徒にもセイギセーギと言われた青葉は、その呼び方を今更訂正することはなかった。

「どこが。お前本当にその位置に股があってみろ、短足どこの騒ぎじゃない。オシヤレとはほど遠いぞ」

青葉は少しムキになって諭す。ポロシャツの襟を立てるのはもう

青葉の癖のようなものだ。立っていないと落ち着かない。それを一過性の流行と同じにされては困ると、問題をすり替えて指摘した。そこに気付かない生徒は、股がこんな位置にあるわけねーだろと言ってくる。高校卒業してから、腰パンでも何でもしてくれと思う青葉だったが、今注意した生徒が、高校を卒業して腰パンをしないことも知っていた。学校と言う広いようで狭い世界。その小さな区間であるからこそ、子どもたちは自由奔放に飛び回り、そして何度も規則を破る。破るためにあるものだという、屁理屈を携えて。

視界が広がれば、それがただの言い訳であると気付いてやめてしまふのだ。

「男ならな、坊主にしろ、坊主。お前のー……それなんだ。三日くらい風呂入らなかつたような、ポマード付けた髪形よりいくつかましだ」

「ひでえな！ しかもポマードとかいつの時代だよ。ワックス。わかるセーギ？ ワックス！」

「なんでもいいから、その頭をどうにかしろ！」

こうしてジエネレーションギャップを感じながらも、青葉はまだまだ固くて青い実を教壇から見つめている。

自分の目の前の道を選びかねている、無垢で真面目な青い実を。

“ヤンチャな五組”と職員室で評判の一年五組は、三十人中二十二人が運動部に所属している。これは同じ一年のどのクラスよりも運動部率が高い。故に、春に行われた球技大会の好成績は青葉も鼻が高かった。何せ、青葉の担当は保健体育である。エースと呼ばれ

る選手こそ一人、二人しかいないものの、二番手や補助が五組には  
沢山居た。飛び抜けて凄いわけではないが、運動神経の良い子たち。  
青葉はうるさく怒りながらも、やはり自分のクラスの生徒が可愛い。

そして、その期間は“問題を起こさずにはいられない質なのでは  
ないか”と思われている五組の生徒達も、何一つ問題を起こさな  
った。皆、試合の結果に必死で、教師をからかうより前に、どのメ  
ンバーで試合に挑めば勝つか、ポジションはどこが適切か、キャプ  
テンは誰だ、くじ運のいい奴は誰だ、ジャンケンが強いのは誰か。

そんな教師から見ればくだらないことを、授業の合間に真剣に話  
し込んでいるのである。そういった報告を受ける度、授業真面目に  
受けると怒れない青葉が居た。それは、かつて青葉が学生だった頃、  
同じように球技大会に情熱を燃やしたからだ。

だから、この十月に行われる体育祭を、彼等の一年の思い出とし  
て何か残るものにしてやりたかった。ヤンチャで、単細胞で、オシ  
ヤレに敏感で、異性にうつつを抜かす彼等の高校一年に、“体育祭  
での優勝”という思い出を。

いつか開かれる同窓会で、酒のネタになればいい。

青葉が思ったその時、隣の席にいる二年二組担当の矢野教諭から  
声をかけられた。

「青葉先生、体育祭かけませんか？」

「自分のクラスにですか？」

そう聞き返した青葉に、まさか勘弁してくださいよと矢野は苦笑  
する。クラス単位の賭け事などしても、春の球技大会を見れば結果

など目に見えている。ぶつちぎりで一年五組が一位だ。破天荒で問題の多い、ただスポーツには真つ直ぐな生徒達に、矢野も接待賭けを持ちかける気など更々ない。

「今年から、三学年の親睦を深めるためにチーム戦になったでしょう。あれで賭けましようよ」

親睦を深めるという尤もらしい理由の裏には、得点板の不足というなんとも情けない事情がある。今まで全学年クラス対抗だった体育祭は、三学年一グループになった。一年五組の場合、同じチームは、二年五組と、三年五組である。二年から選択科目が増え、文系と理系に別れる南第一高校の、二年五組と三年五組は理系のクラスだった。故に、男子が非常に多い。

「いいんですか？ 男子多いですけど」

「嫌だなあ、勝つ気マンマンじゃないですか。忘れてないですか青葉先生。二年五組も三年五組も、元運動部員は現役も含めて二十人もいないんですよ」

文化部でも足が早かったり、肩が強かったりする者はもちろんいる。存在はしているのだが、青葉は二年と三年の五組の生徒に、見知った顔を見つけられないでいた。写真部、生物部、と言った名だけの活動実績のない部員なら、何名か思い出せることが青葉の眉間に皺を寄せた。

「僕のクラスはさして運動神経がいいわけではないんですけどね。三年と一年にエースが四人ほどいる。野球部とサッカー部、バレー部、テニス部なんですよ。ね？ いい勝負になると思いませんか」



三学年合同。確かに、勝負は微妙なラインだと青葉は思う。

「負けたら学食奢ってくれればいいですから」

「学食でいいんですか？」

「俺達が薄給な上に小遣い制なんだから、それくらいが妥当でしょう」

確かにその程度であれば、青葉の小遣いも痛まない。それは隣に座る矢野も同じなのだろう。お互い、小学生の子供を持つ、今から金など余る程いる家庭を持つ身だ。

「いいですよ。順位が上の方がー」

そこまで言った青葉の言葉を、矢野の手が止める。

「何言ってるんですか。もちろん総合優勝した方が勝ちですよ。後は全部負けです」

矢野のその言葉に、根からの体育会系である青葉の闘志に火がつかない訳がなかった。

その日のホームルームは、一年五組と二年に組に大声が響く。内容はどちらも同じだったものの、一年五組の場合、最後に付け加えられた一言が違った。

「お前等よく聞け。今度の体育祭、どうせやるなら優勝を狙え。学年じゃない。学校でだ」

前々から三学年合同を聞かされていた一年五組の生徒は、その青葉の声にざわざわと声を上げる。二年五組と三年五組の球技大会の成績を、どこからか拾ってきた生徒が居たのだろう。五組中どちらも四位という微妙な成績は、生徒達の士気を上げるには至らなかった。

無理だ、だって二年が、いや三年の方が、と囁く声の中、ねつとりとした笑みを浮かべ青葉はこう続けた。

「優勝したらお前等全員にアイスを奢ってやる。しかも、ガリボリくんじゃないぞ。一個三百六十二円の高いやつだ」

その声に、一年五組のヤンチャな青い実がやる気に満ちたのは言うまでもない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9920x/>

---

奪取せよ！

2011年10月28日16時06分発行